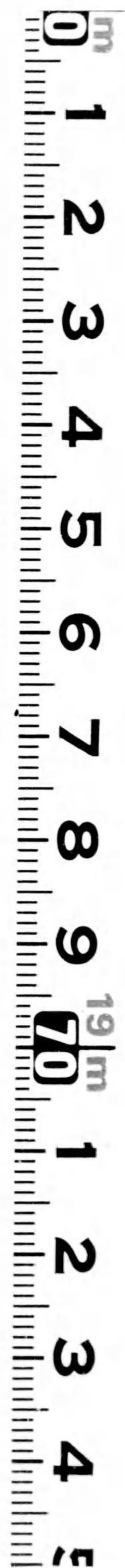
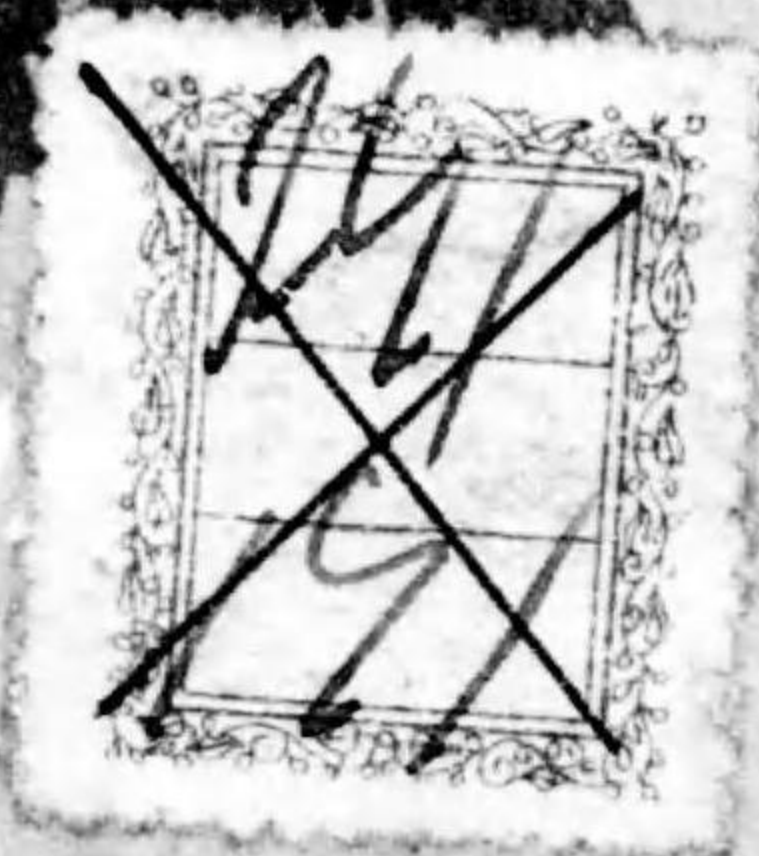


三人集

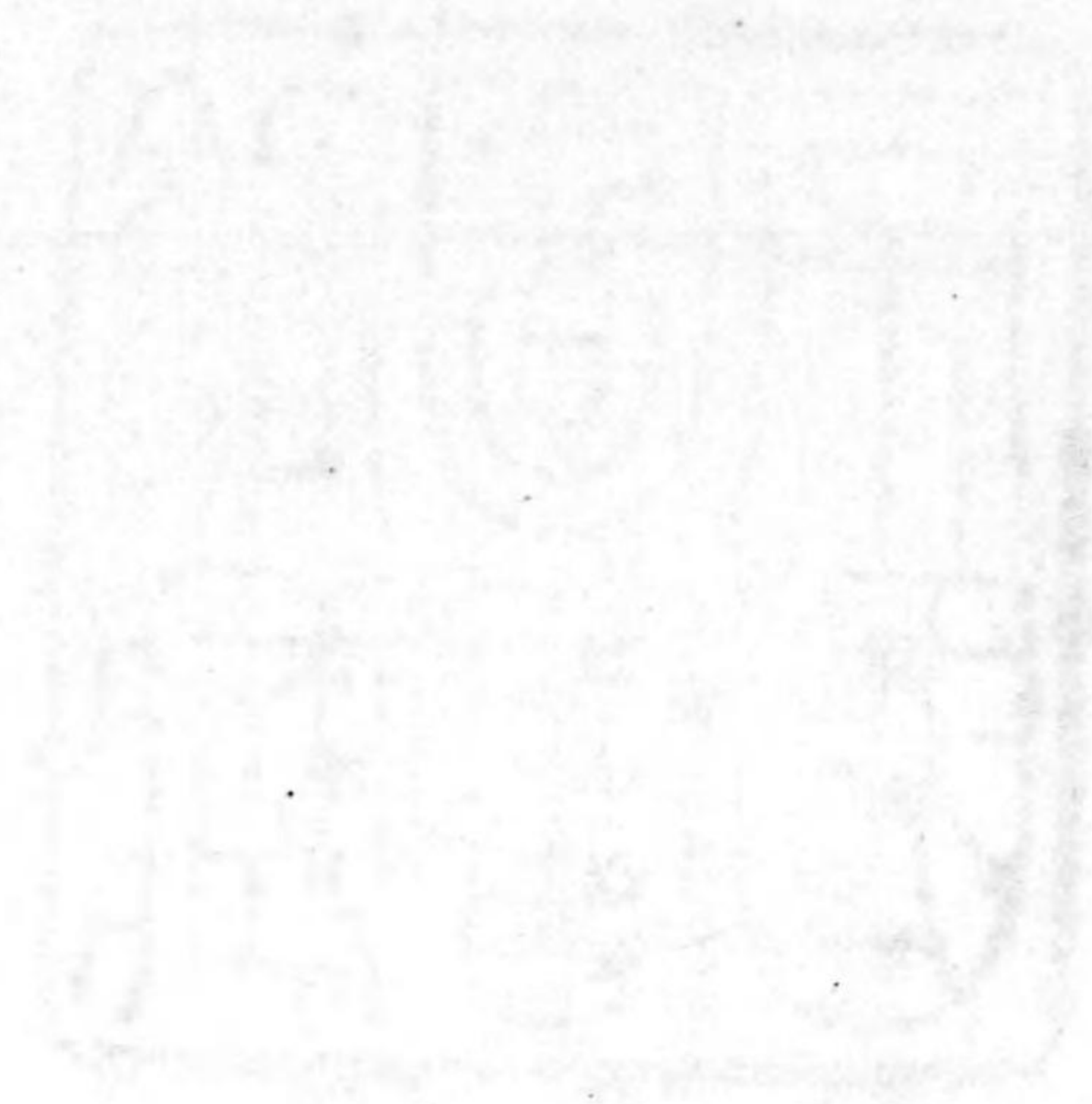
特100

866

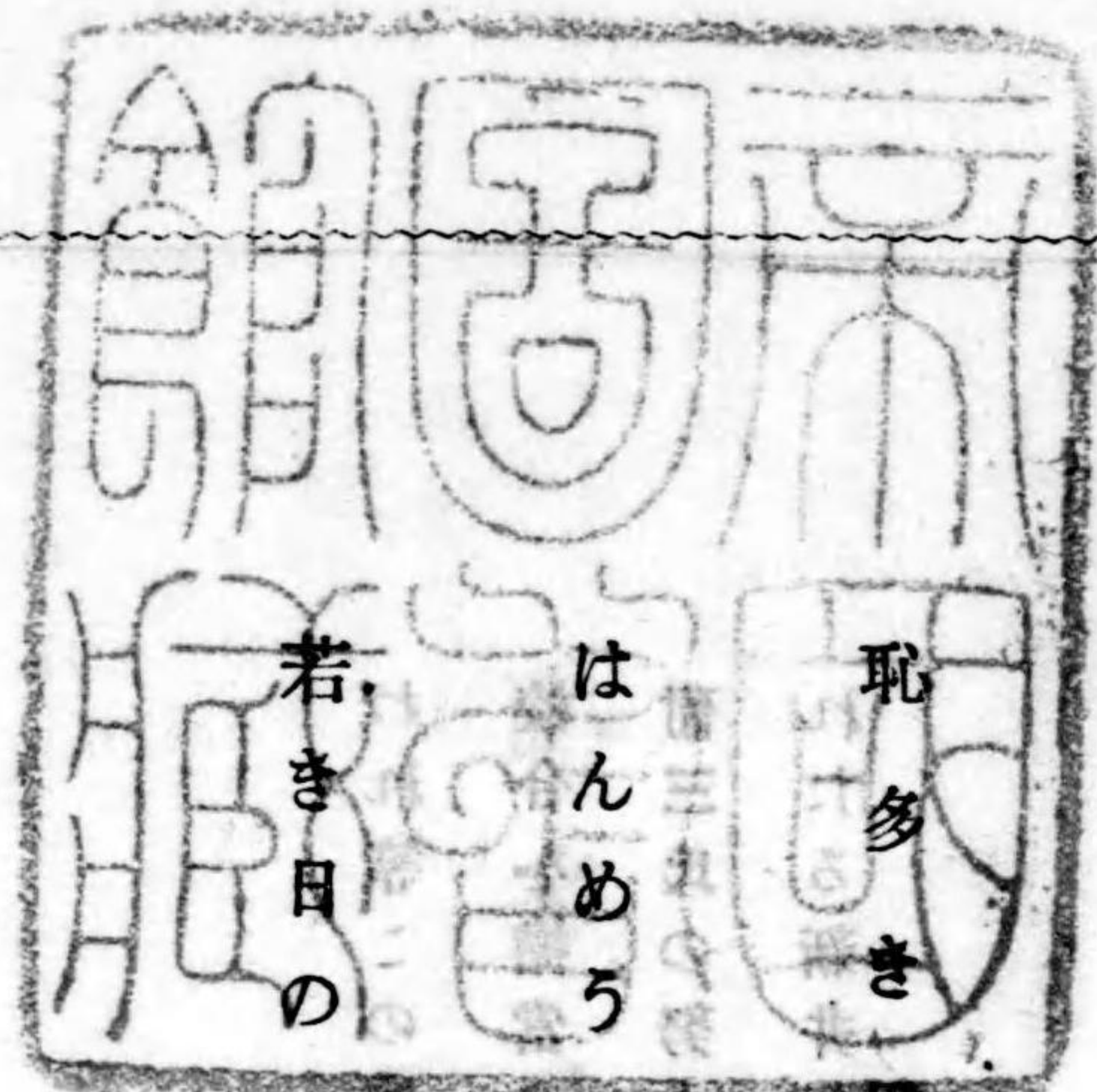


始





特100  
866



若  
き  
日  
の

幻  
想

山  
本  
迂  
平

は  
ん  
め  
う

の  
脊

上  
西  
友  
千  
代

恥  
多  
き

思  
出

笠  
松  
芙  
蓉

大正  
11. 11. 11  
内交





# 恥多き思出

大正九年度より  
大正十一年まで

二

## 小 序

◇上は神に對して下は土地自然に對して同じきもの人類に對して、我は涙ぐましいまでに敬虔の念を持つ。我々は此の敬虔の念によつて始めて生活を認識し、眞の自己生活の完成へと進んで行く。

◇我々は事物の中に自己を没し、再びその中に自己を見出す時、我々は自己の存在と感覺認識したものを結合するが、これが我々の美を享樂し得る根據である。

◇サンタヤーナ氏の著書に曰く「美的價値は積極的にして善そのものゝ認識なるが、道德的價値は此に反し否定的消極的にして寧ろ惡の

認識である」と。私はこれに多大の共鳴を感じる。

大正十一年猛夏

紅葉山麓にて

笠 松 芙蓉

## 旅 情

吉野紀行

土筆の和物食べて忘れてゐる

湯 淺 行

犬呼ぶ獵師が太い帯の黒さ

三

湯 淺 行

若者高々と櫛の實取つて話して

阪井病院

障子立てきり病院の廊下の朝の輝

野衛三居訪問

裸男のふるまひに宵暗のせまる

同 上

まぶしき空仰ぎ水車ふみ止めない

同 上

三人がめいくの夏の夜は更げゆく

遊 學

すこやかに過させ給へば若鮎の匂ひよからん

和 歌 祭

笥の香に女等言葉のやさしく

視察旅行

旅に居て冴え返る夜のきもの

奈良 良 行

雑貨店の主人が手馴れた荷造の春の夜

京 都 行

白き灰のみの小さき火鉢なり

保田校にて

山茶花散りしき兒は焼石持ち

田邊にて

君を知るのみにて君の家の二日の月の明るく

大峯登山

ましろき額の汗ばみ茶屋の車夫の午睡

同上

午睡後の椽側のたゞまひ遠き山

大阪見物

つゝじの白い造幣局でお前が黙す

京都

牛乳持つて来た坐らずに居る寒さ

奈良にて

花の下の女等杯さゝげて笑つて

野葡三氏を農事試験場に訪ぬ

オランダ苺盛りあげてなつかしい言葉

同上

クロバー茂れば農園の女の仕事に餘念なし

同上

クロバーに坐して女のしぐさ凝視する

若き誇り

障子の黒影よく知つて胸が躍つてる

寒雨の蛇の目傘と行く疾しくない

節分の夜

虎杖はしる音續く踞る彼がうなじ

風邪聲の君が強ひて言ひ張らうとする  
廣き一室の炬燵のふくらみ蒲團かむる  
彼岸櫻によりそひいらだたしき夕陽  
菜の花の小徑行くためらふことなし  
彼岸櫻そこばく手折りはにかんでゐる  
稻刈り夕のお前の姿まともに見た  
ことなく暮れし夜の紫陽花の匂ひぞ  
尾花にふれて話しつゞける二人である  
話が止んで何氣なしまつさげ折つてゐた

木犀咲く部屋ぬちの満足してゐる  
羽織ぬぎ大きな帯をなつかしみ振舞へり  
女つゝましく話して卵の花道のつゞくや  
凧を見上げて恥しい三日を過したお前だ  
桑摘み夕の空赤々と心にかゝはりなし  
夏蜜柑の汁がしたより君をまともに見た  
立ち止つた彼女の額の少しの汗ばみ  
茶摘み一日うら若き彼の歌の絶えずある  
白つゝじ咲く何も恥らうことはない



春寒の朝のお前が化粧の薄く  
氷柱楮殻で叩き落し待せられてゐる  
冬木肌に觸るゝことの冷くねたんでる  
初風呂に上氣せし彼がひそかに握る乳房  
何もかもよく知つて黙つてゐる春霜の朝  
春雨の部屋で腫とく逢つて黙す  
彼が云ひ漣つて青草の長い堤だ  
桑の芽が出る嫁いでの日暮るゝ  
恐ろしい幻影が過ぎる手を握つてゐる若葉

紫陽花咲く始めからの女の心であつた  
女等着飾つて植田の畦に並び立つた  
或夜の思ひ出の戀のハンカチかみしめ  
彼がつましましき振舞ひの田植の日なり  
蛇の目傘の彼女が目禮して行つた夏雨の朝  
夏雨の中行く二人が到頭笑つて終つた

### 大自然の愛

雨戸繰る妻が春霜を訴ふる言葉よ

雪に輝く白壁の君が家居の高原  
薺摘み来て牛小屋の牛の大きい腫  
鏡開きの母の力一杯の肩の歪み  
かるた遊び止めて黒土に立つ土の匂ひ  
學校始めの訓辭が短くて旭光がまばゆい  
手まりつくおとどいの明暮のしぐさ  
水仙ふみにじられ鶏の行方  
猪の黒い影が冬木の中に消えて  
我家のみ起き出でて朝の氷柱の長さ

母の忌日の夜のはらからの炬燵温くて  
初風呂の一人で来た物足りなさを感じず  
木流しから見向かず藪柑子の数々  
三極揃へてる二人とも癒つてる  
柘の枝さして歸る何にも思つてない  
自炊生活の苦しい冬が行く彼岸櫻よ  
鶏の叫びが沈丁花の垣根なりし  
梨の芽丸々と太り短き枝々の張り  
過ぎ行く松並木の陽炎やまます

一四  
稻刈り夕の稲穂かるく握りて  
お寺の銀杏の葉を拾ひ合つてお前ら  
鍛冶屋が袖仰いで言葉  
百合の山に入るためらふことなし  
葉櫻の家に入ることの淋しく  
物足らなく爺さん菌籠持つてゐる  
尾花に埋もれいが栗つかんで弟  
子等働きの手を止めずコスモス白々と咲く  
栗のいがむくことの馴れし子とむく

黒い種子蒔く子等の喜びの一ト時  
女教師の早起きの英ネルの着物  
水上げの朝の素足の冷たさを感じ  
更衣せし農婦の稲刈鎌の鋭く  
一列道を行く荷馬行く萩花  
すかく歩み來し青草の路はるかに續く  
川原に下り立つ蒼黒き岩のつゞく五月  
田植えの彼等を見返る川の濁り水  
夏帽の君が耕しの手をおろそかにした

上簇間際の桑摘みの爪をいたく痛めた  
子のない家の燕の巢の臺が麥稈であつた  
蛙なくくらやみの起きふしの我が家  
あこの喜びの幟よ倉高く陽にはゆる  
新し單衣妹のしぐさ弟のしぐさ  
春蠶が太る嬰兒の顔の赤色薄らぎ  
納税の人等集りこの寺はれぐしく  
木流しの聲は短日の暮れを賑はしうした  
秣切る冬日に牛は靜かに反芻せり

春雨の朝の軒端から梨へつゞく煙  
秣切る音がして梅の香がする  
この若者ら終日石を運んで白い梅です  
枇杷が咲いて馬の糞古する我等  
足袋ぬぎて快き歩み二三步  
妻に逆はず青葉の山を見廻る  
願書出してからのわが眞夏の机  
足の瘡癒えず今日も青葉陰行く  
鮎釣りの君等に聲かけんとす

桐の花一面の畑よ我家の者らの慰み  
木いばらのいちごよ登山者の手には觸れず  
宮の樹立暗くて一つの笛の音  
卯月八日の空高々と花立てし家  
若草もえ出づ電柱はろかにつゞく  
床の桃を脊にしたお前のしぐさ  
遠しく雪が屋根から下つて父が顔上げた  
火鉢はらからのまどる餅がふくれる  
まい手まりが轉つて南天の實のゆれ

たそがれの吹雪に暮るゝ我等我が家  
梅の家のはれやかな笑聲の眞晝  
色鉛筆持つて居ることの喜びの椿咲く  
春川に下り立つ眞晝の一時  
吹雪亂るゝ樟の大樹一しきり吹かるゝ  
銀杏の葉をうける掌小さきあこの手  
つゝましく居る秋宵の鐵瓶の響き  
合掌の一時時の初日影の長し  
赤旗立て秋晴れの一時日を子供等

家のまはりが落葉して留守であつた  
黒土の匂ひに親しみ彼が畦を動かす  
リレーレースの子供憩ふコスモス咲いた  
この大雨に歸つた父が柿籠によつた  
串柿の甘さになれて眠つて終ふのだ  
すぐろに立ち晝餉の畑の父呼ぶ子  
苗代蛙がやかましく牛の仔が産れた  
給桑後の晝餉時妻の袖ぐちの蠶  
田植の繩もつ私の今日のしぐさ

黄いちご一散に麥帽稈の我等近づかんとす  
牛つれたる夕の百合の赤くもありし  
冬山に入ることの嬉しく生木肌に觸るゝ  
大地ふみしめ寒雨の何の匂ひもない  
鏡餅出して丁寧に物云ふて内儀さん  
鶏小屋に入ることの嬉しく朝々のめうと  
わずかに温みを感じ初夏の卵握る  
五月雨の日のひねもす燕の聲を感じ感ず  
父は部屋うちに老眼鏡拭ひ紫陽花さく

紫陽花の下に朝顔移植する彼の眞顔  
暫時夏帽の我等若葉の山に隠れん  
養蠶教師が溫度表手にしてからの話です  
梅雨晴れの夜の添臥しの妻のいびき  
明け放された作法室で青葉山見てる  
水が泡立つて行く山陰の川が静かだ

恵まれざる悲愛

いたつきの妻が障子の明るさ見ん

圍爐裡の側の醜い心隠さない  
春寒の夜の憚らず話しつゝける  
住職が夜々の夜更しの懷爐の冷たく  
年市の人混みに毛皮の首巻の君  
柑子の皮剥ぐ何の隔てもない  
川面寒く木流し暮しの恥ぢず  
木流し等夜の集ひ賭けしもの  
傭人の二人で寂しく暮して爐邊の串柿  
數の子に打あけられない惱み

耳たぶの霜ばれの男の行商の品々  
 藪柑子に愁ひ隠くさうとする  
 古首卷の女の淫なしぐさの年市  
 冬川曲りはしために戀するほどの暮し  
 圍爐裡離るゝ亂行に氣遣いてゐる  
 凧買つて歸る偽つてゐるのだ  
 切干大根よ醜き我が心隠す  
 牛つれ行く秋雨の中の屈強の若者  
 屑繭手にして叱られてゐる

母子淋しく麥秋の雨に濡れたり  
 おとどひのいさかひの麥刈りつくされ  
 卯の花咲き亂れて高野参りら道わけ  
 いさかひのいさかひのはらからの卯の花の家  
 蜂のいたづらの長き脚ぞ陽の強し  
 卯の花こぼれ荷馬の荷の大がさな  
 糸繰り女群なして唄ひて過ぎ行く  
 糸繰り女の聲絶えず終日杵の音  
 父が働き止めた麥秋の我家人のふるまひを見た



妻の羅の姿笑ふことを止めないで正午  
 汽車とどろき麥畑うちやめない  
 はらみ女貧しくして莢豆むしる  
 葱を洗ひながら春夕の顔をまともに向けた  
 かよわき葉をむしり種蒔いてめうと  
 つとめ人の夫婦者草ふみ行くぞ  
 堤長々とたんぼほしいまゝに咲いた  
 春寒の畑にただ只管に鋤を動かうごかし  
 椿咲く家の女等見えすして此の頃

働き暮しのめうと春草見まいとする  
 餅つきのお前のふるまひを見まいとした  
 春寒の朝わだかまりなくて爐を離るゝ  
 大工たき火して笑つてる師走の朝  
 芥はたく板場の寒燈のゆらぐ暗く  
 焦慮の一ト日のことなく暮れて炬燵  
 冬日背にして畑に下り立ち言つた  
 寒詣彼女がコートコートの衣づれの音  
 懷爐もつ父の愛に遠ざかりて子



ハンメウ

一名「みちをしへ」と云ひ昆虫類中鞘翅類に屬す、觸角は長しくて絲狀をなし眼は大にして突出し大顎強し、前翅は金緑と紫色と相混じて頗る美麗なり、山林の砂地に多く歩行若くは飛翔し、恰も人を案内するの狀に似たり。

(理科辭典)

はんめうの脊目次

更生

はんめうの脊

寂

美しき國よ

少年の日をなつかしむ

埋もれた過去

力

生活の川

雜

更生

積りの悦

空澄むや

秋

大積り

大積り埋めて干せる

めけるかも

棕櫚干せる積に露のたちこめて春を思はず暮の一時

空澄むや

水無月の夕の空気をよがして麥わらをたく音のひろごる

桑の葉を縁側にさらし打ちつゞく五月の空を眺めけるかも

天づたふ朝日子見えす雲行かずしめり重たき  
水無月の空

雲の影しづかに墜ちてゆく春の飛鳥の原のま  
ろくかげれる

秋

大いなる秋の天地男の子てふ誇うれしく空を  
見上ぐる

午後二時に時計とまれり川近き床屋の椅子に  
秋風をきく

はんめうの背

その紫色

足長蜂

その紫色

木槌山ツチヤマ我が上りゆく足の邊の豆はんめうの紫の脊

足長蜂

五倍子の芽はほのに黄ばめり下かげに足長蜂の巢のかゝりあり

寂

火の見のはしご

らんぶのほや

石

火の見のはしご

三八

家もなき水田の岸にむつくりと火の見のはしご立てるけるかも

らんぶのほや

びちりとわれるらんぶのほやの響にも淋しさこもる秋の夜なれば

石

鍬の先にかちりとふれて僅にもそれありと知られる土の底の石

美しき國よ

月夜の川

百合の道

三九

月夜の川

月の夜の川は紫紺の丸帯をしけるごとくに流  
れゆくかも

魚付の保安林はやしを後に初夏の鹽津の海の輝ける

色

百合の道

打ちつれて山路下れば百合の香の草いきれす  
る中にまじりて

栗の芽と楢の若葉と青すゝきゆさにゆりつゝ  
山を下るも

海の風今日も荻藻の島越えてたゝきの鼻の風  
見旗ふる



少年の日をなつかしむ

演壇を下りて

煙

演壇を下りて

演壇を下りて息づく控所の窓に入り来る初夏の風

暮近き秋の山邊を寫生する少年畫師に紅葉ちりくる

藏王堂屋根のふしんの足場まで櫻の花は散りて行くかも

暮れゆけば十戸の村の夕炊の煙にひゞく山寺の鐘

錦繪の裏張りをする我が父の七十路すぎたる  
御手の皺かな

煙

雉子啼けば樵夫の爺のたばこのむ煙はゆるる  
晝の林よ

天つ日の光のどけき小山田にすてられつゝも  
咲ける菜の花

藪蔭のみかん畠に一株のそばしらじらと咲け  
る夕ぐれ

埋もれた過去

A

或る人に答へて

C

D

A

夕闇は顎を埋めて吐息する君の襟にもせまり  
ぬるかな

たまきはる生命をかけていひ出でし言葉にあ  
れどいと小さかり

打ちならば言葉はなくて吐息する我等の前に  
せまる夕やみ

こよりなき機會は得つれ明すべき言葉を知ら  
でやみし吾はも

山駕籠と荷馬の通る紅葉日の峠に立ちて君を  
思ひぬ

B 或る人に答へて

我が爲めに面やするまで思ふてふ人ありとし  
も思ひ得ざれど

まことゝも思ひ得ざれど歩み來し我のかたへ  
に女はありき

薪とる乙女の姿目に入れど破れし縁今いかに  
する

C

あかし得ざる愁いだきて見も知らぬ他郷に君  
は今とつぐらむ

聲あげて泣ける幾度白蓮は泣かねど涙ひまな  
しといへど  
何事も皆空なりと告げて來し此の一尋の文の  
かなしさ

D

和歌町の夕やみにふと出あひたる後すがたの  
エプロンのさま  
名も知らぬ寺に櫻の咲きゐたり君を思ふてた  
へられぬ日に  
誰といふあてなしされど待つごとき心地に道  
を行く人を見る

カ

あらがねの土

あらがねの土

あらがねの土にしひそむふかしぎの力を思ひ  
たねをまくわれ

鍛ひ上げしくろがねの身に秋風は男の子の力  
ふきこみてゆく

生活の川

補習生よ

土曜日

つゆばれ

補習生よ

教へ兒の誰を戀ふとにあらざれど只何となく  
その日待たるゝ

——女子補習日——

つゝましく印刷物に目をおとす少女を見れば  
心うれしも

嬉々嬉々とたはむれながら上りゆく教へ兒の  
後につゞく吾はも

土曜 日

口汚う學資の高を小言する養母の下に歸へる  
土曜日

つゆばれ

つゆばれのその一時を吾子の群平均臺により  
て遊べる

五月雨の川は濁れり思ふこといひ了へずして  
外に出づれば

ちく／＼と頭はいたみ何事も手につかずして  
日はたゞに過ぐ

雑

みかん山

李の花

みかん山

心よき勾配もてるみかん山夕陽に映えて我を  
待ち居り

秋日さす工場の裏の丘に出でしばし息つく女  
工等の群

さしやかな栗の林も我ものと思つてあれば心  
なごむも

李の花

五六

しらじらと李の花はかへりさき手術する日は  
近づきて来ぬ

驛前の茶店の庭に車夫の居眠れるを見つゝ汽  
車を待つかな

さくさくとタイヤの音も心よく走りゆくなり

朝風の路

若き日の幻想

迂平詩集

五七



## 若き日の幻想

五八

こゝに集めた私の詩がどれだけこれを読んで下さる人たちの前に価値あるものだか、自分には解らない。只私は正直な自分の心からの要求によつて書きつゞけました。

若き日の幻想——まことにこれこそやがては過去の思出として、たまにしか私を訪れないであらう若き日の惱ましい愛慾の記録であり、憂鬱の記録であり又歡喜のそれでもあります。その外、私は何も言ひますまい。

とまれ私は巻頭に於いて、曲りなりにもたど／＼した私をこゝまで育て、下すつた、「時」といふものに深い感謝を捧げませう。

——一九二二、八——

## 回山の影

小羊の股に觸れる様な  
柔かな曲線に隅どられて

ぐん／＼と成長する山の影の頼もしさ

葡萄色の日南と緑色の日蔭とが

はゞからずに行ふ熱いキスの上を

陽炎がをどつて寺院の塔は動く

はるかに眺める若人の

額は汗ばみ腫は燃える

おゝ

力ある山の影のうれしさ

五九

回 海岸にて

六〇

波が光る

水鳥がやけに飛ぶ

狂女が白い腕をさらけ出して一さんに海岸を走つた

太陽の老軀が

よた／＼と波の上をたゆとうて

軽い夕とゞろきと／＼もに

別離の悲哀を眞赤にはき出した

太陽が危篤である

すべてのものゝ「更生」

回 月

光

何といふ幸福さだ

俺は今月光を浴びて歩いてゐる

月光を「死の光」と言つたのは誰だ

「死の光」だつていゝ

水のように俺のこの身体を包む月光は

たとひ「死の光」だつて俺はうれしい

世の人の多くが俺から離れて遠くへ走り

世の人の多くをすてゝ願ない俺にとつて

「死の光」月光ほどふさはしいものが又とあらうか

俺は幸福だ

俺は「死の光」月光を浴びて

虫の聲に包まれて、露を踏みしだいて歩いてゐる

六一

俺は幸福だ

回蛙

動かうともしない

石にうづくまつた蛙

おまへの赤い夕焼雲の瞳に

複雑な世界を私は見る

痴鈍の好漢

出目公!

おまへは何を夢みる?

回夜

夜ははいよる

梧桐のかげから葉櫻から

すべて色あるものを一様におしつゝみ

「静かであれ」と私語り歩く

光が死ぬ時夜は叫ぶ

勝ち つた音のないその叫び聲が

やがても悲しいうれひとなる時

醜い過去の追憶が

暗黒の中から生れて来る

さうして夜は

恐ろしい静謐さをもつて自分の上にのしかゝり

臆病にふるへてゐる木立の様な自分の心を  
さんぐくにこづきまはし  
惑はせ淋しがらせ悲しませ  
ふと吾にかへつた時  
限りない寂莫さで私の心に喰ひ入る

回 寂 寥

やるせない心かいいだき  
ひとりうみべに出づれば  
くれ残つた一つの眞赤な雲  
おゝさみしさはこゝにもある

回 初 夏 の 雨

重い鐵鎖は静かにほどかれ  
固い扉は徐ろに開かれた  
黎明を小糠のやうな雨が降る  
葉櫻に結んだ露がぼとりと落ちると  
白いいばらが静かにうなづく  
薄情な様な、でもうれしい  
軽い投げキツス

回 初 夏 の 山

初夏の山は青く光り

陽の白堊は目にしむ

身体中どことなくかゆい様で

思はず頁ヘリヂへ太息を浴せる

さうした時である

若者の腫は雉子の様に血走り

蠶が桑を漁る様に何かを求め

幸福と歡樂との淡き夢に

回釣らない私

舟は三間 船は二挺

私は

今日もかうして

かうして大海に釣を垂れてゐる

太平洋の水が

長い岬をめぐつて

白い腹を光らせながら

私の舟にぶつかる

きれいな臟腑が散らばり

時々名も知れない果物を

土産物として打ちよせる

びちやびちやと

波と舟との飽かない接觸

波は大海の脈膊だ

あの脈膊にち―つと耳をすます時

私はいろんな聲を聞く

権力 壓制 自由 反抗 呪咀……死……

ところてんでも切るやうに

あの青く光る水を

さつと切つたらどうだらう

そうして

日が暮れて

歸りのびくは空つぽだ

今日も 回大 空

青い大空をちつと見つめてゐると  
 限りない生命のうごめきがわかる  
 豊艷な肉体をうすものにつしみ  
 處女のように赤くはにかみながら  
 静かな舞踏をつづけてゐるものも  
 燃える血の音たてゝ  
 はち切れさうななめらかな腕を曲げて  
 只遊蕩をのみ求める淫亂な姿も  
 眞赤にぬれた唇に何かをつぶやきながら  
 廣い胸を張つて抱擁の格好をするものも  
 うるんだ大きな腫で  
 だまつたまゝちつと見つめてゐるものも

おゝ たくさんの生命がある  
 そしてそれがすべて女の相をしてゐる  
 さうして私をとりもち  
 私を溺れしめやうとする  
 それでも私はぢつと見つめてゐる  
 青い弓なりの大空を  
 ぢつと見つめてゐる

回 太陽と若者

太陽は頭上にある  
 若者はしづかに

しづかに嫩草を踏んだ  
 大きく手を擴げて  
 大空を抱かうとしたが  
 やがてくずをれて  
 若者はさめざめと泣いた  
 太陽は頭上にある

回 空 想

夜學を終へて  
 歸る途すがら  
 おぼろ月夜に

麥の葉はそよぐ  
苗代は白く淡く光り  
名も知れない虫が  
チチとなく  
からりころり  
沈着な下駄の足音  
若者よ  
お前は何故急がうとはしないのだ  
おまへはつまらないもの  
それに――  
教育といふ美名のもとに

幾十の人の子集めて  
今の今まで耳赤らめ眉をあげて  
さかしくあれと告げて来た  
その自分の心の姿の  
あまりに悲しければといふのか

匂ふ月影  
しつとりとした野つば  
熟睡の世界  
今は憎みもわづらひもない世界  
今日一日の感謝の世界  
おゝ愛の世界の只中を



自分は獨りで歩かうといふのか

うそだ

若者よ

お前の目はいつも

何かを追つてゐるでないか

高い、どこかを見つめてゐるでないか

さうだ げにお前の樂園は

「空想」の國にある

到底此の世に現す事の出来ない空想

本當の空想

おゝ哀れなものよ

お前は歩いてゐる

さうやつて何時までも

黒い土の上を歩いてゐる

からりころりと

現すことの出来ない「空想」を

夢みながら

回 雨はたしく

雨はたしく

屋根を心を

和やかな寢床の中からも

昔の恩讐をよびさまし

泣かせ笑はせ怒らせ悲しませ  
 果ては懺悔の心に神を求めさせる  
 雨はしみごむ  
 屋根に心に  
 踊る心を  
 不思議にしんみりと落つかせ  
 ある夜口けんくわをして  
 別れた女をしみぐと思はせる

## 回八

月

八月は 熟し切つた女の様だ  
 その目は惱ましくうるんで

とりたての茄子の様に輝いてゐる  
 八月の腕は滑かでうつくしい  
 よく太つてはち切れさうな肉体を  
 青と赤とのだんだらの羅物に押つゝんで  
 何かかい抱くものを求めてゐる  
 八月はよく笑ふ  
 身体中動かして笑ふ  
 皮膚のどこを抑へて見ても  
 熱い血がさんくくと流れてゐる  
 おゝ唇はあゝまで眞赤にぬれてゐる  
 「誰も此の唇がほしかないの？」

あゝ病める私の  
赤い神経はまるはだか  
八月の誘惑には  
たまらないのだ

回渚

海は静かに  
八月の空にふくらがり  
飽食した野獣のやうな舌なめづりを  
あく事もなう大地に興へてゐる  
果てもなく廣がるその海の惱ましさを  
健康で自由な漁村の子供は

黒い肌をつやくと光らせ  
海に育つけどものゝふるまひ  
手にもつ白い介殻はギラリと目を射る  
太陽は海、大地すべてのものを  
大きな翼に蔽ふてきつく抱擁し  
熱い口づけを一つひとつに興へてはをれど  
病める私に淋しい波の音

回幸 福

部屋中を飛びまはつてやろか  
身体中たゞきまはしてやろか  
テーブルへでもくちづけしてやろか

大きな聲でどなつてでもやろかそれとも

此の幸福さはどうだ

一たい俺はどうすれば良いんだ

回わかれの唄

やがてまた 會ふまでの 別れとは 思へども なにとなく 涙流

れて 悲しみ とどめがたし

別れはつらし 今 君と別れては すべてが無 あゝわれは あす

の日より ただひとり さみしく 砂の上にすわり しづかに暮

れゆく海面<sup>つら</sup>ながめ Kよ 只君のことのみ 思ひつづけん

おゝ やがてまた 會ふまでの ひとよきの 別れとは 思へども

なにとなく 涙ながれて 悲しみ とどめがたし。

回 失

題

七月の月は霜の夜よりも淡く

波は靜かに青き死の歌を繰返へす

人つ子も見えない海べりに毎夜

かうして岩の上に話してはをれど

我等のあゝその命運は

野の草に結び露よりもはかなし

はかなきを別れては

淋し

淋し

淋し

淋しきにわが胸の、かくときめくは

今、只、世に君とふたりあればぞ

テレモロ——かすかに い 笑

マンドとでもい進めば良いの？

何ものかな静か作のさめつけは

真向から 闇の部屋の身を包む

だつ廣い赤い笑ひ

かそかなる匂ひ

時候おそぬ都度種冷——

静かに即ちのゆめむむ省村は

だまつてそこには醜い敗残の自己が

かやりたての蛾のやうにふるへてゐる

団扇 木 私はもう嫌になつては對して何事も教へざるに市場に於ける

回 ある少女は天淵はよく我を教ふ。ソクラテス——

、、、赤に於ける人間は我を教へず

、、、樹木こそ教ふ、真美を、善を

あなたを何野御存心にも温い

それで木肌は現れ取を奪はる時は

どこからともなくあなたを月さましつゝある

丁度春さき雪がとけいさかふな さからふな、聞えるな

芽が萌え出で鳥が轉るやうに

うるんだ瞳に

ゆるやかにカブるものを伸ばせ

純白の真綿にそつと包んだ真紅の右

それが次第に熱を加へるであらう

きよらかなバージンよ

、、、、、、、、

回 淋しき遠足

只砂塵蒙々たる中を

行きつもどりつ

山は青し

水は清し

されどそは何するものぞ

吾が心淋しく

吾が目空虚に向ふ

二百の児童は

喋々として語り

嬉々として笑ふ

されど

あゝされどそは何するものぞ

吾が心淋しく

吾が目常に空虚に對ふ

許せる友のなき故に

回 蹲

る

八月の夜をふるはせる

テレモロー—國赤かにい 笑

マンドどちらへ進めば良いの？

何ものか切端を切りでめくけはい

闇の部裏向身も包む

かそか夜が白く横い赤い笑ひ

時候おくれの白百合—

静かに何ものかのうごめくけはい

自己といふものを省みる

だまつそ處には無い敗殘の自己が

かやりたての蝶のやうにふるへてゐる

赤い笑

木

私はもう蝶の羽を脱ぎ捨てて何事も教へざるに市場に於ける

回ある少女に

人間はよく我を教ふ。ソクラテス—

、、市に於ける人間は我を教へず

、、樹木こそ教ふ、眞美を、善を

あなたは何れも御存じはれども温い

それで木屑に我を教へる者も時々は

どこか静かなる程やあなたを召さましてある

丁度春はさき舞がなげさからふな、悶えるな

芽が萌え樹を鳥が囀るゆゆは

うるん儼然に

ゆるや似たゆとさるもの胸はばせ

純白の霞縹をまわりの包の綾着紅あか

それが次第に熱を加へるであらう



大正十一年十月三十一日印刷  
大正十一年十一月三日發行

定價金壹圓

印刷所	印刷人	發行者	同	同	著作者
和歌山印刷株式會社	關 宗 一 郎	和歌山市杉ノ馬場二丁目六番地	笠 松 彬 雄	上 西 友 千 代	笠 松 彬 雄
		和歌山縣有田郡八幡村大字遠井五九二	山 本 豐 楠		

市に於ける人間は我を教へず  
樹木よ  
おん身こそ我を導く



終

